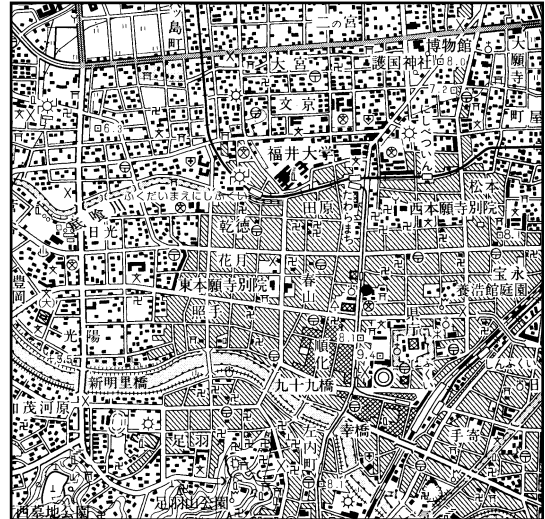


## 6. 福井城跡

所在地：福井市宝永4丁目地係  
調査原因：仁愛女子高等学校整備事業  
調査期間：平成23年7月1日～10月14日  
調査主体：福井市文化財保護センター  
調査面積：約400㎡  
時代：近世



位置図 (S=1/50,000)

**調査地の沿革** 調査地点は、福井城で最も北にあたる「北の大外曲輪」に位置します。現存する絵図との対比では、築城当初は侍屋敷地であったところ、寛永5年(1628)に3代藩主松平忠昌が当地に東照宮を建立しました。しかし、福井城の大半が焼失したとされる寛文9年(1669)の大火後に北三の丸に移転し、その後は普観寺が建てられ、仁愛学園の敷地となる昭和30年代まで存続しました。

**遺構** 発掘調査では、東照宮(17世紀前半)および普観寺(17世紀後半から戦災後)の遺構面を検出しました。

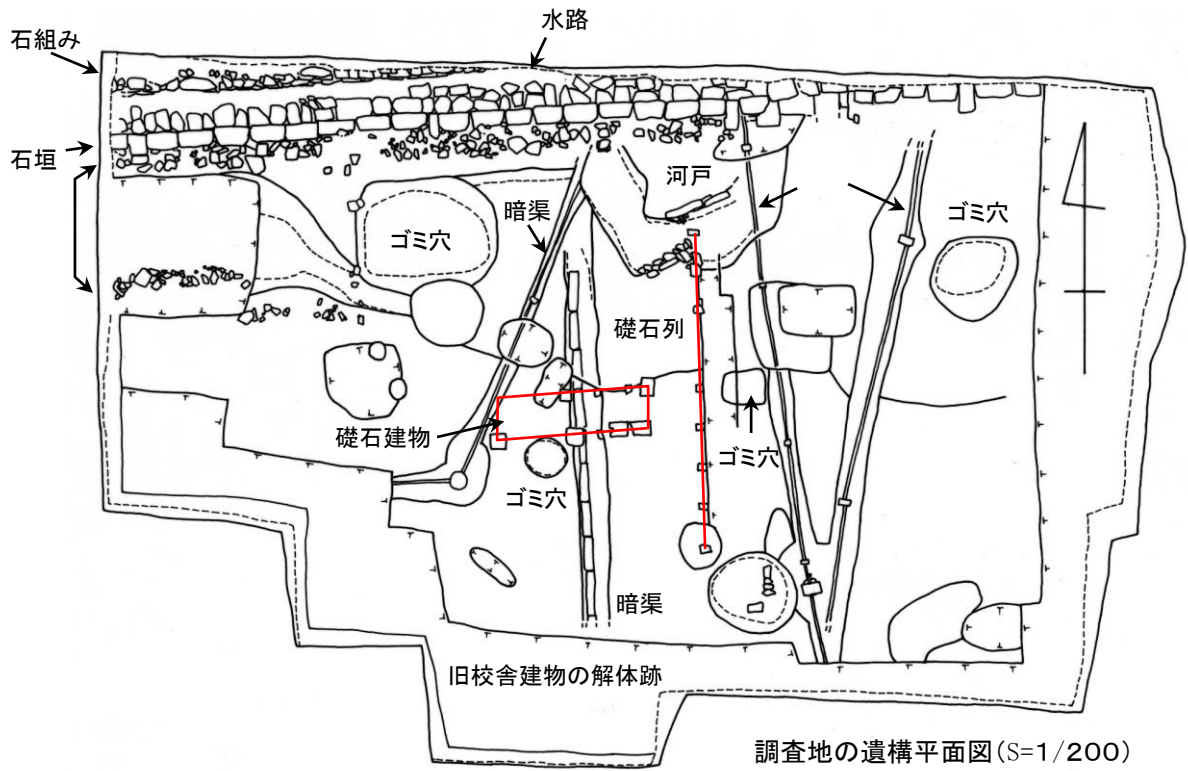
東照宮の遺構は、北面する石垣および土塁です。石垣は幅60～70cm、高さ50cm、奥行き40cm前後の笏谷石の切石を積み上げており、表面を平らにする丁寧な加工を施していました。残存していたのは2段分ですが、上面には石垣石の組み合わせを良くするための切り欠きの痕跡がみられたことから、本来はさらに1～数段分高かったと考えられます。また、石垣の裏面には、裏込石や土塁の痕跡を確認しています。

この石垣は、出土した位置や規模、石材の取り上げ時にみつかった刻印などから東照宮の北側を区画したものであったと考えられます。東照宮建築物の痕跡は検出されませんでした。遺構面の標高は南ほど高く傾斜していたことから、絵図に描かれたような拝殿は調査地の南側にあった可能性が高いといえます。

普観寺の遺構は、礎石建物や礎石列、河戸、暗渠、ゴミ穴を検出しました。河戸や暗渠、ゴミ穴は出土遺物の年代から幕末に埋められたこと、礎石は上面に戦災による焼土層が堆積していたことから、昭和20年まで建物が存続していたことが分かりました。

また、東照宮の石垣は、普観寺の頃には下1段分が敷石等によって埋められ、対面となる石組みを築くことで、城内に飲料水を供給する水路として改変されています。

**遺物** 出土遺物で特徴的なのは、石塔や瓦類が多くみつかったことです。江戸時代において瓦類は貴重であり、当地が侍屋敷地ではなく、寺社地であった一つの所以といえるでしょう。



調査地全景 (東照宮、東より撮影)



石垣正面 (東照宮、北より撮影)



水路 (普観寺、西より撮影)



礎石建物 (普観寺、西より撮影)